新作能『不来子先生』の世界 — 禅と芭蕉俳句の〈融合文化〉の実験的な試み—

The World of the New Noh Play: *Blyth-Sensei*
— An Experimental Attempt of the Cultural Fusion
of Zen and Basho's Haiku —

平 辰彦

TAIRA Tatsuhiko

Abstract: On 18 November 2020 I saw a “new Noh Play: *Blyth-Sensei*” written by Munakata Kuniyoshi. This Noh play is a tribute to R.H. Blyth, a British humanist and the author of books on Zen Buddhism and haiku. Blyth's ghost is the main protagonist, the “shite” of the Noh play. The ghost of Blyth appears in his grave. Then the ghost compares Henry Thoreau to Japan's greatest poet, Matsuo Basho, and dances, singing. For this revised version, several Basho's haiku are combined with a *Komuso shakuhachi* performance by Master Nakamura Akikazu. Munakata-sensei combined Zen Buddhism and Basho's haiku poems in this new Noh play. I would like Munakata-sensei to insert Blyth's death haiku or *jisei-no-ku*: “Sazanka” (“Camellia”) also into a new Noh play: *Blyth-Sensei*. The thoughts of Japanese Zen Buddhism and Basho's spirit appear in this new Noh play. *Blyth-Sensei* is a valuable contribution to the harmony and combination of cultures between Blyth and Basho.

Keywords R.H. Blyth, H. D. Thoreau, Matsuo Basho, haiku, Zen Buddhism, Noh, Peace.

R. H. ブライス, H. D. ソロー, 松尾芭蕉, 俳句, 禅, 能, 平和

2020年11月18日(水)、国立能楽堂で原作：宗片邦義・作能：津村禮次郎の新作能『不来子先生』を見た。この新作能の副題は「たたかわざる者 R. H. ブライスとH. ソロー」である。これは、2019年3月24日に観世能楽堂で初演された『たたかわざる者』の再演であるが、再演の際、題名が変更されているのは、ブライスの禅の思想と松尾芭蕉の俳句による融合文化の実験的な試みがなされているためであると考えられる。

ヘンリー・ソロー (1817-1862) はアメリカの超絶主義者。生命の尊厳を訴え、メキシコ戦争に反対し、非暴力抵抗を説き、ガンジー、キング牧師などに大きな影響を与えた。著書に『森の生活 (ウォールデン)』などがある。

R. H. ブライス (1898-1964) は英国人の平和主義者で、ベジタリアン。学習院大学などで英文学を講じ、世界で最も短い詩といわれる俳句や川柳を英語で翻訳し、世界に日本の短詩型

文学を紹介し、広めた。1942年12月には、英文『禅と英文学』(*Zen in English Literature and Oriental Classics*)を北星堂書店より出版。この著書でブライスは「禅は真の宗教」であり、「宗教はポエトリー(詩)」であり、「詩は日々の生活」であると語り、「禅とは詩的な生活」であると規定する。そしてブライスは英文学にも禅の思想が認められると指摘し、シェイクスピアやワーズワース、コーリッジなどの作品を実例にあげながら、禅と英文学の関係を詳しく考察する。

また『禅と英文学』では、ワーズワースなどの詩と対比しながら、松尾芭蕉の以下の俳句を取り上げて翻訳し、芭蕉の俳句にも禅の思想が深く浸透していると指摘する。

荒海や佐渡によこたふ天の川

A wild sea,
The Milky Way stretching across
To the isle of Sado.

古池や蛙飛び込む水の音

The old pond,
A frog jumps in —
Plop

ブライスは英文『禅と日本文化』(*Zen Buddhism and Its Influence on Japanese Culture*)や『禅仏教緒論』の著者である鈴木大拙の影響を強く受け、座禅を知り、禅の理解を深め、1949年8月には、英文『俳句 (*Haiku*) : Eastern Culture』(第1巻)を北星堂書店より出版。翌年8月には、英文『俳句 (*Haiku*)』(第2巻)を、さらに1952年1月には、英文『俳句 (*Haiku*)』(第3巻)、同年5月には、英文『俳句 (*Haiku*)』(第4巻)が、いずれも北星堂書店から刊行された。

この英文『俳句 (*Haiku*)』(第1巻)には、芭蕉の「古池や蛙飛び込む水の音」が、次のように翻訳されている。

The old pond:
A frog jumps in —
The sound of the water.

この「古池」の俳句は芭蕉の俳句として広く人々に愛誦されているもので、貞享3(1686)年、芭蕉が43歳の時の作とされている。この俳句には、一句の中に「さびしさ」の風情が強く感じられるが、従来の詩歌には見られない斬新な点も認められる。

江戸期の俳論史を研究テーマとする研究者で実作にも手を染める復本一郎は『芭蕉俳句16

のキーワード』（日本放送出版協会）の第7章「不易流行」の章で「古池や蛙飛び込む水の音」を取り上げ、この一句には「現代人の我々にも迫ってくる魅力を持っている」と述べている。復本一郎は芭蕉の「古池」の句には、芭蕉の作句理念である「不易流行」が認められると述べている。「不易」とは変わらないことであり、「流行」とは変化することである。一見、矛盾する概念を芭蕉は融合させ、新しい概念を創造している。芭蕉はこの「不易流行」の理念を通して和歌のもつ「不易」の文学的な特性と俳句のもつ「流行」の「新しさ」を融合し、＜融合文化＞ともいえる前人未踏の芸術の領域に達する俳句を創造したのである。

また復本一郎は、そこに登場する「蛙」は「声高」に鳴く「蛙」でなく、「飛ぶ」「蛙」が描かれているが、そこに注目したのは、まさに「芭蕉の発明」であったという。

芭蕉が私淑した歌人・西行の歌でも「蛙」は、次のように詠まれている。

水さびるて月もやどらぬ濁り江にわれすまむとてかはらずなくなり

『古今集』の「序」に「花に鳴く鶯、水に住む蛙の声」と述べられているように、それまでの日本の詩歌では、「蛙」はその声を詠ずるものであった。例えば、上記の西行の和歌にも「かわづなくなり」と「蛙」の声が詠まれている。

俳諧でも山口素堂の次の「蛙」の句は、和歌の伝統を踏襲し、「蛙」の声が題材にされている。

雨の蛙声高になるも哀れ也

芭蕉は、こうした日本詩歌の伝統的な「蛙」の詠み方ではなく、「蛙」を「古池」に「飛び」込ませたのである。これは、きわめて革新的な詠み方で、独創的な「新しさ」がそこに認められる。

俳人・長谷川権は『古池に蛙は飛び込んだか』の著書の中でこの芭蕉の「蕉風開眼」の「古池」の句を取り上げ、誰もがこの句を「古池に蛙が飛び込んで水の音がした」という意味だと思っているが、そうではなく、この句は「蛙が水に飛び込む音を聞いて心の中に古池の幻が浮かんだ」という句であると述べている。

長谷川権は芭蕉の弟子・支考の聞き書き『葛の松原』を典拠とし、芭蕉は蛙が水に飛び込む音を聞きながら、まず「蛙飛び込む水の音」と詠んだ。長谷川権はこの時、屋内にいた芭蕉は蛙が飛び込むところを見ていないと考え、このことから「古池は蛙が水に飛び込む音を聞いて芭蕉の心に浮かんだ幻である」と結論づける。

長谷川権は「古池」の句が「蕉風開眼」といわれるのは、「芭蕉が旧風を脱してみずからの句風に目覚めたこと」をいうと指摘している。支考の『俳論十論』でもこの「古池」の句を取り上げ、次のように書いている。

「(芭蕉は) 古池の蛙に自己の^{まなこ}眼をひらきて、風雅の正道を見つけたらん。」

「古池」の句は「蛙飛び込む水の音」で一つのまとまった意味をなしているが、芭蕉はこれに次元の違う「古池」を「取り合わせ」のである。つまり「古池」の句を通して芭蕉は現実の世界を描く俳句の世界に作者の心の世界を取り入れたのである。この意味で「古池」の句は「蕉風開眼」の一句といわれている。

芭蕉がこのような世界を創造できた背景には、「切字」の「や」の存在が大きいといえる。芭蕉の死後、高弟の去来が芭蕉の生の言葉を書き記した『去来抄』には、芭蕉が「切字」について述べた次の部分がある。

「切字^{いる}を入れるは句を切るため也。切れたる句は、字を以て切に及^{きる}ず。いまだ句の切る・切れざる^{しらざる}を不知作者のため、先達、切字の數^{さだめ}を定^{いる}らる。此定字を入れる時は、十に七、八は^{おのずから}自^{きる}句切なり。」

芭蕉は、ここで「や」などの「切字」を句にいれると、「十に七、八」ほとんどの句は、そこで切れるというのである。芭蕉のこの考えに従えば、「古池」の句は「古池」と「蛙飛び込む水の音」は完全に切れていなければならない。「切字」は語句と語句を切るからこそ「切字」なのである。それを「古池に蛙が飛び込んで水の音がした」と解釈したのでは、「切字」の働きを全く無視した解釈といえるだろう。

また英文『俳句 (Haiku)』(第1巻)と英文『俳句 (Haiku)』(第3巻)には、芭蕉の「**荒海や佐渡に横たふ天の川**」の俳句が、それぞれ異なる翻訳で収録されている。

A wild sea!
And stretching across to the Island of Sado
The Galaxy. (Vol.1)

A wild sea!
And Galaxy stretching out
Over the Island of Sado. (Vol.3)

芭蕉のこの俳句は元禄2年7月7日、新潟県の出雲崎で詠まれたといわれている。この出雲崎から佐渡が島は遠望できるというが、芭蕉のこの句は写実的な写生句ではなく、芭蕉の心象風景を詩的に詠んだ俳句であるとみるべきであろう。

復本一郎の『芭蕉俳句16のキーワード』(日本放送出版協会)の第4章「ほそみ」では、芭蕉の「**荒海や佐渡に横たふ天の川**」が取り上げられている。復本は元禄2年、『おくのほそ道』

の途次に執筆されたこの句の次の前文を引用し、そこに述べられている「冷^{すさま}じ」さは「悲しさを誘発する」ものようであると述べている。

「むかしいまに到りて大罪朝敵の人々遠流の境にして、物うきしまの名に立侍れば、いと冷^{すさま}じき心地せらるゝに宵の月入りかゝるころ、山のかたち雲透^{すき}にみえて、海のおもてほのぐらく、なみの音いとど悲しく聞^{きこ}え侍るに」 (佐渡が島は、昔から今日に至るまで、大罪人や朝廷に背いた人々が島流しにされているところもあり、マイナスのイメージの島となっているので、気分が滅入っているところをもってきて、宵から出ていた月が消えかかり、島の山影はわずかに見えるのみで、海上は暗く、波の音がひとときわ悲しく聞こえたので)

復本は、この「荒海」の句にみられる「悲しさを誘発する」世界を「ほそみ」と捉え、それは「あくまでも通俗卑近な対象の中の意外性において、求められるべきものである」と指摘している。

また松尾靖秋は、この「荒海」の句を鑑賞し、おそらく杜甫の「夜」と題する漢詩が発想の契機になっていると考えられると述べている。「天の川」は秋の季語。

佐渡が島は世阿弥が政治的な事情で遠流された地であり、芭蕉もそうした佐渡の悲劇的な歴史を踏まえてこの句に深い懐古の情を含ませて描いていると考えられる。

英文『俳句 (*Haiku*)』(第4巻)には、芭蕉の辞世の句として知られる「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」の俳句が、次のように翻訳されている。

**Ill on a journey;
My dreams wander
Over a withered moor.**

芭蕉は、元禄7年10月12日に亡くなるが、この辞世の句は10月8日の夜に詠まれたといわれている。この芭蕉の辞世の句には、生涯をかけ、俳句を探究してきた芭蕉の臨終に近い壮絶な心の声が読者の胸を響いてくる。「枯野」は冬の季語。

復本一郎の『芭蕉俳句16のキーワード』(日本放送出版協会)の第5章では、「枯野の美学」と題して芭蕉の「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」が取り上げられている。復本は「旅に病んで」の「夢」は「病床の芭蕉を現実世界へと運んでくれるタイムマシンとしての機能を果たすことのできるもの」と述べている。復本は芭蕉の目覚めながらの「夢」は「芭蕉を現実そのものへと運んでくれる」ものであり、その時求めた芭蕉の「夢」は「枯野をかけ廻る」己の姿であったと述べている。そこには、芭蕉の「枯野」への執着が認められる。

芭蕉は歌人・西行を私淑し、その西行を追いかけながら、「さび」を志向したといわれているが、西行の歌にも次のような「枯野」を詠んだ歌がある。

見ればげに心もそれになりけり枯野のすすき有明けの月

芭蕉もこうした西行の「枯野」の歌は熟知していたものと思われるが、復本は芭蕉が最後の一句において「夢は枯野をかけ廻る」とつぶやいた事実が大いに注目しなければならないと述べている。芭蕉は最後の最後まで「枯野」に美を求めた俳人として生涯を閉じたのである。

長谷川權は『古池に蛙は飛びこんだか』で「枯野」の辞世の句を取り上げ、この句の「夢は火の玉のような塊となり、吹きすさぶ木枯しとなって枯野を疾走する。」と述べ、「死に至る病の果てに芭蕉が打ち開いたのはみずから夢となった枯野を駆け回る凄まじい心の世界だった。この芭蕉最後の句もまた古池の句と同じ構造であること」は誰の目にも明らかであると述べている。

芥川龍之介は、この芭蕉の臨終の模様を『枯野抄』で巧みに小説化しているが、宗片邦義は新作能『不來子先生』で禅と芭蕉の俳句を融合させ、新作能の形式で見事に舞台化している。

『不來子先生』の公演では、会場で日本語による台本と英文による台本が配布された。私はこの英文による台本と日本語による台本を読み較べてみた。宗片邦義が作成した英語台本では、芭蕉の俳句には、すべてブライスの翻訳が用いられていた。

「荒海」の俳句は、ブライスの英文『俳句 (*Haiku*)』(第1巻)に収録されている翻訳が掲載されている。また「古池」の句も、ブライスの英文『俳句 (*Haiku*)』(第1巻)に収録されている翻訳が掲載されている。芭蕉の辞世の句は、ブライスの英文『俳句 (*Haiku*)』(第4巻)に収録されている翻訳が掲載されている。

今後、再々演の時には、芭蕉の日本語の俳句と共にこうしたブライスの俳句の英語の翻訳も謡いで観客に伝えられれば、一層、新作能『不來子先生』の世界が深まるのではないかと感じられた。

能舞台では、鏡板の前に地謡方(加藤眞悟、坂真太郎、松山隆之、土田英貴)が座り、その前に小鼓(幸正昭)・大鼓(佃良太郎)・笛(松田弘之)の囃し方が座わる。

時代は現代。場所は神奈川県・北鎌倉の東慶寺。アメリカのソロー研究家・ハーディング教授(永島充)が、来日の折、ブライス教授の元学生(長谷川晴彦)の案内で北鎌倉の東慶寺にあるブライスの墓を詣でる。

学生は教授にブライス先生が教室で講義前に「人を一人殺せば、殺人罪。大勢殺せば、英雄なのか」と語ったと伝える。地謡方は、ブライスの『禅と英文学』などの業績を述べ、「世界最大の自然詩人は松尾芭蕉なり」とブライスが語ったことを伝える。

教授を東慶寺のブライスの墓に案内すると、学生は「この国の精神文化は思想・慣習・習俗」を「諸々織り混ぜた」ものと語ると、教授は「折衷もしくは融合文化。大いなる和なり。」と語

る。この教授の語りには、宗片邦義の日本文化に対する考え方がよく表明されている。

学生は教授にブライスの「不來子古道照心居士」という戒名を伝えると、教授は「不來子」とは、どういう意味かと尋ねる。学生は「訪ね来ぬ人 (A man who does not come.)」の意味であると答える。この時、切戸より尺八の奏者 (中村明一) が登場し、地謡方の前で演奏する。

一の松のあたりに置かれたブライスの墓の作り物からブライスの霊 (津村禮次郎) が能面をつけて登場。芭蕉の「**荒海や佐渡に横たふ天の川**」の俳句を詠む。そして「われ不來子なれども。時を隔てて今ここに来たり」と語る。以下、ブライスの霊と教授の対話がかかわされ、ブライスの霊は教授に「**真実**は日常の言葉の中に現われたり」と語り、地謡方は笛の演奏の中、「人命こそは最も尊重さるべし」と語る。

ブライスの霊は「われらが足下に大地あり。」のところで舞ながら、数回足で床を踏み鳴らす。そして「われらが頭上に天空あり。人は宇宙・大自然の中にあり」と謡い、ブライスの霊は尺八の演奏の中で舞う。その後、ブライスの霊は「存分に生きたり、後悔なし」と語り、ソローは「日本の最も偉大なる詩人・松尾芭蕉に比さるべし」と語り、『奥の細道』の冒頭の「**月日は百代の過客にして。行かふ年も旅人も**」と語る。尺八が入り、ブライスの霊が舞う。

さらにブライスの霊は芭蕉の辞世の一句「**旅に病んで夢は枯野をかけ廻る**」を詠む。そして「人生に意味あるは絶望的なときのみ」と語る。

ブライスの霊は尺八の演奏の中、芭蕉の俳句「**古池や蛙飛び込む水の音**」を詠み、「古池とは何ぞや、蛙とは何者ぞ」と謡い、「ソローが書きたる一言一句。すべてユーモアに溢れ。彼一流のユーモアに」と謡う。地謡が「その生涯を一篇の。詩に創らんと生き抜いて。共にこれを言葉もて、書き記さんは難かりし。」と謡い終る。尺八、演奏しながら幕に入る。

初演の公演と同様に再演の『不來子先生』の公演でも、世界中で戦争がなくなり、人類の進化がおこなわれることを願うソローの超絶主義やブライスの平和主義がテーマになっている。

この新作能の題名にもなっている『不來子先生』は宗片邦義の恩師であり、宗片の著書『ブライス先生ありがとう』には、多くのエピソードが紹介されている。

この公演は「非戦・非暴力・生命尊重」という平和主義をテーマに作られた新作能であり、「反戦能」と呼んでもよい作品である。

『不來子先生』の津村禮次郎のブライスの霊は、迫力のある演技でブライスの魂を見事に形象化していた。また舞台上で演奏された中村明一の尺八はブライスの霊と融合した＜音霊＞で観客の心をとらえた。素晴らしい演奏であった。

能は「亡くなった人の霊が真実を語る芸術」であり、幽霊は「目に見えない真実や、言葉で語れない真実」を語る。

私は学位論文『Shakespeare 劇における幽霊―その演劇性の比較研究―』で博士 (英米文学)

の学位を取得したが、シェイクスピア劇の幽霊も能の幽霊と同様にこの特色が認められる。

私は現在、日本平和委員会の発行している「平和新聞」で「平和川柳 虹のひろば」の川柳選者を担当しているが、ブライスが愛した川柳には、「川柳界の小林多喜二」と呼ばれた鶴彬つるあきらの書く次のような「反戦川柳」も含まれている。

手と足をもいだ丸太にしてかえへし
 万歳とあげて行った手を大陸において来た
 高粱の実りへ戦争と靴の鉋
 暁を抱いて闇にゐる蕾

この鶴彬つるあきらは、1927年12月、治安維持法によって特高に検挙され、1928年9月14日、豊多摩病院で死去。29歳だった。

この鶴彬つるあきらの<死>を想い、女性川柳作家・井上信子いのうえのぶこは、次のような「平和川柳」を戦時中に創作し、発表する。

国境を知らぬ草の実こぼれ合い

今日でも井上信子いのうえのぶこのこの川柳は「平和川柳」の代表作として語り継がれている。

宗片邦義の新作能『不來子先生』は鶴彬つるあきらや井上信子いのうえのぶこの「平和川柳」のように世界の平和を願う「反戦能」であり、それは禅の思想と芭蕉の俳句の精神が溶け合った能様式の<融合文化>の結晶体ともいえる新作能であった。

今後、再演の機会があれば、新作能『不來子先生』に是非、ブライスの辞世の一句「山茶花に心残して旅立ちぬ」の一句も挿入してもらいたい。

このブライスの辞世の俳句には、ブライスのこの世に対する惜別の情が「山茶花」に託されていて感慨の深い俳句である。そこには、ブライスの禅の思想と芭蕉の俳句精神がよく反映されている。